

ビデオ・アートから映像アートへ ～愛知県文化情報センター所蔵映像作品を中心に～

会期：2012年6月8日(金)～10日(日)、19日(火)～21日(木) *6日間

※「イメージフォーラム・フェスティバル2012」(6月13日(水)～17日(日))を挟んで開催。

会場：アートスペースA

近年、映像メディアを用いた芸術表現を総称して“映像アート”という言葉が用いられるようになってきている。この言葉に込められた、映像をアートのメディアとして追求する姿勢は、1950～70年代にかけて商業的な劇映画に対するアンチテーゼとして、物語の描写とは異なるフィルム表現のあり方を探った実験映画や、1970～80年代にかけてビデオという新しいメディアの可能性を追求したビデオ・アートの流れを汲むものであるといえる。今日、実験映画やビデオ・アート作品を鑑賞する意義は、映像メディアとは何かという原初的な問いに立ち返り、その問いの中に表現としての様々な可能性の芽があったことに、改めて気づかされる点にあるといえるのではないか。

この上映会は、愛知県文化情報センターが所蔵する作品を中心に、1970～90年代にかけて、ビデオ・アートと呼ばれていたジャンルの作品が、表現としての洗練度や厳密さを高めるにつれて、映像を用いたアート作品(＝映像アート)と呼ぶべきものへと深化していった流れを照らし出すことを意図した。

「イメージフォーラム・フェスティバル2012」を挟んだ会期となることから、同映画祭のジャパン・トゥモロウ(一般公募部門)に応募された、愛知県出身・在住作家の作品を集めた、愛知特別プログラム「愛知の新世代たち」や、昨年開催された「第5回あいちデジタルコンテンツコンテスト」一次審査通過作品、また、愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品『ギ・あいうえおス -ずばぬけたかえうた-』(2010年、監督：柴田剛)や『Generator』(2011年、監督：牧野貴)といった近作を併せて上映し、この分野の新しい動向をプログラムに反映させることも考慮した。

「愛知の新世代たち」では、出品作家による舞台挨拶を行ったこともあり、盛況であった。また、会期後半の20日(火)は、台風がこの地方を直撃するアクシデントがあったが、それにもかかわらず熱心な観客が来場したことは、特筆すべきだろう。